

盛岡市内「減クルマ」交通転換の冬期環境向上実験調査

(岩手県盛岡市)

地域の問題・課題

盛岡では、自動車交通の抑制と環境にやさしい交通を進めるため、官民一体となって自転車や徒歩、公共交通を重視する取り組みが行われている。しかしながら、地方都市盛岡では依然として自動車への依存度が高いため、なかなか交通転換が進まず、冬期間においてはなおさら自動車に頼る傾向が強まるのが現状である。

冬期間においても、自動車に過度に依存することなく、通勤・通学、通院や買い物など日常生活での安全で快適な交通環境を確保することが必要である。

実験の目的・目標

「減クルマ」社会の実現を目指し、自家用車からの転換の受け皿となる自転車やバスの安全性、利便性、快適性を高め、交通渋滞の緩和を図ることを目的とする。

- (1) 学生や市民参加による交通環境の点検手法を確立する。
- (2) 自転車の交通安全を確保するための啓発や警告の方法を確立する。
- (3) 冬における歩行者、自転車、バス利用者の交通環境対策として、住民に除雪の協力をいただける方法を確立する。
- (4) 既存バス路線のルート延伸や変更によりバス空白地を解消し、自家用車からバスへの交通転換を促し交通渋滞の緩和を図る。
- (5) 自動車からの転換を図るため減クルマ運動に協力し運動の盛り上げを図る。

実験項目及び内容

- (1) 市民参加による自転車の安全を確保するための危険箇所の点検・周知・対策実験
アンケートやワークショップにより、地域住民（高校生や子育て世代を含む）からの意見を集め、自転車の危険箇所を把握する。また、その結果をもとに危険箇所の周知や啓蒙のため、警告表示および啓発資料の作成配布を行う。
- (2) 冬でも安心「バス停・街角の雪かきスコープ」設置実験
冬期間のバス利用者等の交通環境対策として、沿道敷地等を活用して雪かき用のスコープを配備し、住民などに協力を求めスコープを使った雪かきを促す。
- (3) 公共交通利用促進による渋滞緩和効果把握実験
住宅地や商店街などのバス空白地を解消し、日常生活の足を確保して自家用車からバスへの交通転換を促し、交通渋滞の緩和を図る。
- (4) 「減クルマ」チャレンジウィーク
11月の1週間、官民一体となって展開するノーマイカー運動に協力する。

実験期間

- (1) 市民参加による自転車の安全を確保するための危険箇所の点検・周知・対策実験
 - ①アンケート実施 平成20年11月23日～平成21年2月6日
 - ②自転車ワークショップ 平成21年1月13日（本町地区）1月15日（青山地区）
 - ③危険箇所調査抽出 平成21年1月16日～2月10日
 - ④啓発資料の配付 平成21年3月6日～3月9日
 - ⑤自転車危険箇所対策実験
 - 看板設置 平成21年2月14日～3月13日（28日間）
 - のぼり設置 平成21年2月24日～3月13日（18日間）
- (2) 冬でも安心「バス停・街角の雪かきスコープ」設置実験

- ①平成20年12月29日～平成21年2月27日（61日間）
- (3) 公共交通利用促進による渋滞緩和効果把握実験
 - ①新庄循環線 平成20年12月24日～平成21年2月27日平日（41日間）
 - ②つつじが丘団地内循環バス 平成21年1月26日～1月30日平日（5日間）
- (4) 「減クルマ」チャレンジウィーク
 - ①運動期間 平成20年11月10日～11月14日（交通量計測は6日と13日）

検討・実施体制

区分	所属団体名
学識経験者	岩手県立大学総合政策学部助手(バス110番)宇佐美誠史
市民団体	馬をめぐる地域まるごと交流連携事業実行委員会、盛岡自転車会議、盛岡にLRTを走らせ隊、環境創造研究所、NPO法人いわてNPOセンター、NPO法人もりおか中津川の会
経済団体	盛岡商工会議所、盛岡駅前商店街振興組合、盛岡まちづくり(株)
交通事業者	I GRいわて銀河鉄道(株)、岩手県交通(株)、岩手県北自動車(株)
行政関係者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 岩手県県土整備部都市計画課
オブザーバー	岩手大学工学部建設環境工学科准教授南正昭、盛岡市建設部交通政策課

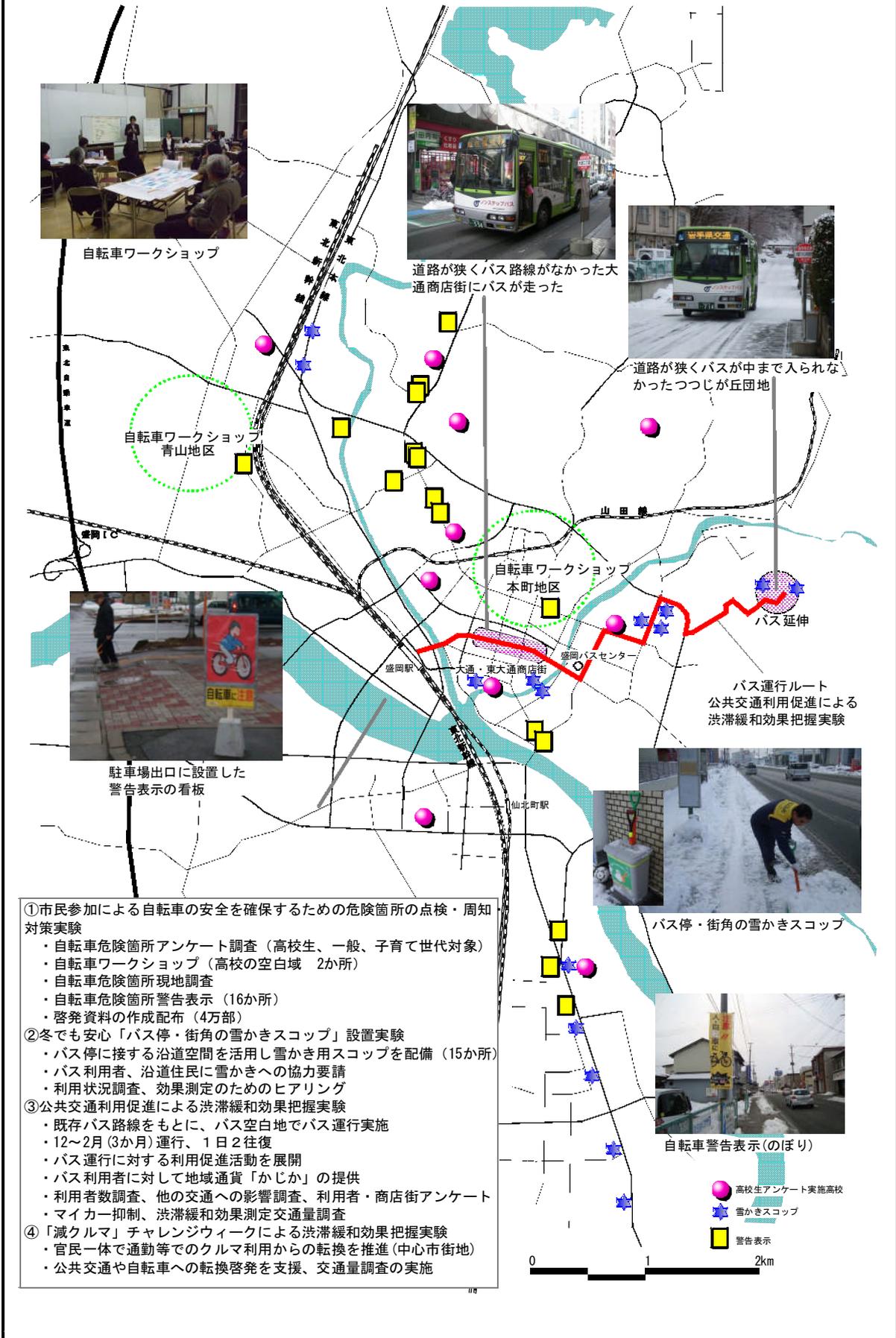
主な評価項目と実験結果

- (1) 市民参加による自転車の安全を確保するための危険箇所の点検・周知・対策実験
高校生、市民、子育て世代など約2,000人の市民の立場からの貴重な情報を収集し、その結果、自転車交通の安全上の問題点を浮き彫りにすることができ、効果的な注意喚起対策（のぼり13本、看板3基）や啓発資料作成（4万部）につながった。
- (2) 冬でも安心「バス停・街角の雪かきスコップ」設置実験
道路の細かな部分での除雪対策として、沿道の民地活用により15か所にスコップを配備した。今シーズンは降雪があったのが4日間で、8か所で利用されていた。
- (3) 公共交通利用促進による渋滞緩和効果把握実験
バスの利用者は1日平均で午前の便が30人、午後の便が28人。バス路線の延伸と変更により利用者の利便性の向上が図られた。
- (4) 「減クルマ」チャレンジウィーク
交通量は運動前と運動期間中とで、50,530台から49,895台へと635台（1.3%）の減となった。参加者5,381人への調査では自動車からの交通転換回数が1日平均603回。

実験後の展開

- (1) 市民参加による自転車の安全を確保するための危険箇所の点検・周知・対策実験
注意喚起ののぼり、看板については、継続実施を働きかけるとともに、将来的にはより強固な部材の採用、道路上からも視認しやすい設置場所の確保が課題である。
- (2) 冬でも安心「バス停・街角の雪かきスコップ」設置実験
沿道の事業所や住民団体の協力を得ながら、より需要の高い場所を選定し、継続実施を働きかける。
- (3) 公共交通利用促進による渋滞緩和効果把握実験
3月末まで運行を継続するとともに、交通規制の変更、安全性の確保、採算性の検討など、本格実施に向けて問題点の改善を図っていく。
- (4) 「減クルマ」チャレンジウィーク
運動を継続的に実施するとともに、参加事業所、参加者数の拡充が必要である。

【位置図・実験概要図】

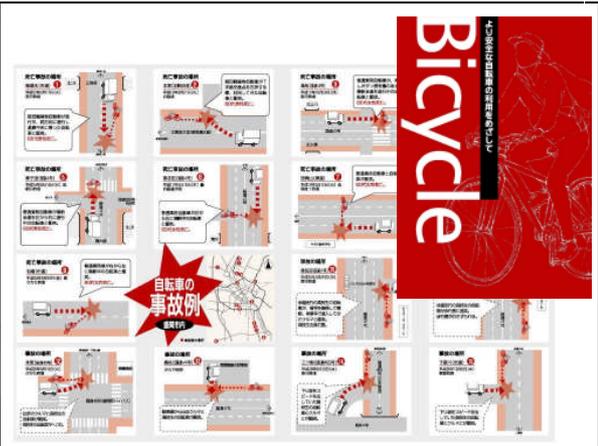


- ①市民参加による自転車の安全を確保するための危険箇所の点検・周知対策実験
 - ・自転車危険箇所アンケート調査（高校生、一般、子育て世代対象）
 - ・自転車ワークショップ（高校の空白域 2か所）
 - ・自転車危険箇所現地調査
 - ・自転車危険箇所警告表示（16か所）
 - ・啓発資料の作成配布（4万部）
- ②冬でも安心「バス停・街角の雪かきスコップ」設置実験
 - ・バス停に接する沿道空間を活用し雪かき用スコップを配備（15か所）
 - ・バス利用者、沿道住民に雪かきへの協力要請
 - ・利用状況調査、効果測定のためのヒアリング
- ③公共交通利用促進による渋滞緩和効果把握実験
 - ・既存バス路線をもとに、バス空白地でバス運行実施
 - ・12～2月（3か月）運行、1日2往復
 - ・バス運行に対する利用促進活動を展開
 - ・バス利用者に対して地域通貨「かじか」の提供
 - ・利用者数調査、他の交通への影響調査、利用者・商店街アンケート
 - ・マイカー抑制、渋滞緩和効果測定交通量調査
- ④「減クルマ」チャレンジウィークによる渋滞緩和効果把握実験
 - ・官民一体で通勤等でのクルマ利用からの転換を推進（中心市街地）
 - ・公共交通や自転車への転換啓発を支援、交通量調査の実施

盛岡市での社会実験実施状況



自転車ワークショップ



自転車安全利用指導マップ



警告表示 (看板)



警告表示 (のぼり)



バス運行 (大通)



バス運行 (つつじが丘団地)



バス停・街角雪かきスコップ



雪かきをしている様子